

# 平成20年度 江別市 特別支援教育便り第9号 「保護者・教員向け」

第9号：平成21年2月  
江別市教育委員会  
学校教育課  
特別支援教育コーディネーター  
深瀬 禎一  
TEL 381-1058

## 平成20年度 江別市地域療育推進協議会研修会より

1月30日（金）18時30分～

### 研修内容

演題 「子育てってたいへん、でも楽しい」 ～子どもを理解するための視点～ より抜粋

講師 北海道大学大学院・教育学研究院・教育学部

附属 子ども発達臨床研究センター

教授 田中 康雄氏

### 1、現実の日本の子ども

#### 今どきの子ども

#### ○ 若者の生きにくさについて

他の国の子どもとの比較より

- ・ 自分自身に自信を持ってない
- ・ 自己評価、満足度の低さ

#### ○ 子どもの成長についての親の満足度

- ・ 満足度が年齢が上がるにつれて下がっていく。
- ・ 携帯電話、ゲーム、—— 実体験が少ない
- ・ 経験が少ない—— 情報で置き換えていく（情報社会による経験の代償）
- ・ 匿名化した社会の中で、「日常」や「生活」を共有する場は消失する（透明化）
- ・ 自己の居場所、生きることの充実感、心情が消滅する（解離化）
- ・ 抑うつ感、無力感を訴える症例が増加
- ・ 強迫性障害の症例の増加
- ・ 行動上の問題（攻撃性）の増加
  - 外的行動：暴力、暴行
  - 内的行動：摂食障害、手首自傷症候群（リストカット・シンドローム）
  - リストカット 14%（血がでたときにホっとする、生きていると感じる）
- ・ 生き場所をなくしている
- ・ 不登校・引きこもり・ニートの増加
- ・ 自己愛的な病理、解離性障害を持つ症例の増加
- ・ 自信・自己評価の低下、自己制御不全、社会参加への回避、自己防衛反応の強化
  - うつ病が多い
  - セロトニンシンドローム セロトニンが出ると気持ちがよくなる
  - セロトニンが枯渇すると、攻撃性が出てくる
  - 全身運動をするとセロトニンが出る
  - 昼夜逆転するとセロトニンが下がる
  - うつや攻撃性：セロトニンの枯渇

いらいらしているのだろう、セロトニンが足りないのだろう

自分への攻撃：摂食障害

自分で自分を守るために、ないことにしよう：記憶喪失——自分を捨てる、気を失う

今の私を引きずって生きているのは辛い

多重人格——自信が持てなかつたり

- ・ 社会的規範そのものの崩壊（なんでもあり）の中で、わずかな、容認されにくい躰きが逸脱と評価され、社会的少数派となる
- ・ 匿名社会の中で、社会参加を回避し、病的自己愛か解離による自己防衛にすがる
- ・ 結果としての自己評価観、自己評価の低下は否めず、時に課題は医療化する  
発達性障害者が増えている  
LD、ADHD、脳性まひ パーセンテージは上昇している

## ◎ 成長を信じる心

われは草なり 伸びんとす

伸びられるとき 伸びんとす

伸びられぬ日は 伸びぬなり

伸びられる日は 伸びるなり

※ 伸び悩んでいるとき：力を蓄えている時です

## 2 育ち

### ◎ 発達とは

- ・ 人間の一生涯にわたる身体機能、知的機能、精神（心）機能に認められる成長・変容の経過
- ・ 遺伝と環境が相互作用的に関係している
- ・ 乳幼児期、学童期、思春期、青年期の各時期を、進んでは戻り、戻っては進みの繰り返し（螺旋階段）
- ・ 成長と退行の繰り返し

### ◎ 子どもの育ち：関係性を育む

- ・ 赤ちゃんが生まれたとき泣くのは、不安から

### ◎ 子どもはいかに安心を手に入れるか

- ・ 言い様のない不安から
- ・ 共に居ることから生じる安心感
- ・ 共に居る中で芽生える信頼感
- ・ 対象を内在化することで一人だけれど、一人ではないという感覚を持つ  
不安を取り除くのが子育て（何も心配ないよ）

### ◎ 不条理を引き受ける感情システムの構築

- ・ 子ども（人）は、常に不確実性の中に生きている
- ・ 子どもは周囲（主に養育者）に「適度に依存して」、状況から保護されて、「共に生きる」（本来子どもは危機的状況をサバイバルしている）
- ・ 不確実性の状況を「楽しめる」こと
- ・ 不確実性の状況でも「大丈夫」という安心をもっていること  
“痛い痛い飛んでいけ”が通用する理由
- ・ 安心は、早期の愛着と基本的信頼感が醸し出す「安全性」により構築される
- ・ 早い自立を求めることは、不確実性を楽しむことなく、引き受けることを強制させること
- ・ 適度の依存、護られているという安心の保障と提供を遠慮しない

◎ 「現実世界」のとらえ方

・ 個別的認識：隣接現実

その子にしか通用しない、存在しない独自の世界とのつながり、認識  
空想や非現実でなくその子にとっては紛れもない現実

これは、関係性の中で発達的に薄まり、主現実のほうが強くなる（生来性から、学習  
へ、共感の芽生え）

移行期には、移行対象（ぬいぐるみ、毛布、布きれ）が認められることもある。

・ 普遍的認識：主現実

時代、心理、社会的価値観から生まれた「現実」の共有  
周囲との関係性のなかで、「識る 学ぶ」

「この現実生きにくい」という事態を抱えている方々は、この隣接現実と主現実の折り合いがうまくい  
かない

隣接現実そのものの強さ、主現実への移行の弱さ、枠組みの弱さなど

子どもの現実——親の現実（折り合いをどうつけていくか）

子どもの現実が守られるといい、

◎ 子どもの発達を考えるライフ・サイクル的視点から

・ 乳児期（～1歳）

基本的信頼感 対 不信

・ 早期幼児期（1～2歳）

自律性 対 恥・疑惑

・ 幼児期（2～6歳）

積極性 対 罪悪感

・ 学童期（6～12歳）

勤勉性 対 劣等感

・ 青年期（12～20歳）

自己同一性 対 役割混乱

・ 発達課題は、善対悪とか、優れているもの対  
劣るもの、という対立ではなく、この時期に  
バランス良く体得すべき光と影の課題と考  
える

※ 1歳までに、いかに信頼感を持てるか

失敗から立ち上がらせる

劣等感があってもいい

これがいいぞ

天使のスマイル

無防備

**順番なので、その月数でなくても良い**

子育ては、その子どもに合わせて

甘えてばかり（不安なんだ）子どもと共に成長していく

負けて悔しい だから勝ちの喜びが分かる

直接体験を 他者を通じてジェンダーを感じる

セルフエスティームの形成

ここでできたこと

3歳くらいから

読めてから、書く練習を

読み聞かせ 文字に読みがついていること

ひらがなをしっかり読んでみよう

◎ 子どもの発達を考える 関係性の視点から

						継続的な世話
						他者との出会い
						課題の達成
						多語文・疑問文の応答（ルール遊び）
						指差し・言語要求（目的遊び）
						自己中心的な哺乳・発声（感覚遊び）
エリクソン	I	II	III	IV	V	VI
年齢	0～1	1～3	3～7	7～15	15～25	25～
課題	楽しむ	自己主張	自己制御	有能感	自分は何者か	無償の愛

◎ 乳児期：1歳半まで

- ・ 生後1ヶ月（無差別な周囲への視覚的認識（ほほえみ反応））
- ・ 生後3ヶ月（養育者への安心と不安（人見知り））
- ・ 基本的信頼感の形成：世界と対人関係に安堵し、身を任すこと

◎ 幼児期前半：1歳半～3歳

- ・ 自己コントロールの獲得（食事と排泄）
- ・ 言葉の獲得（言葉でのやり取りを身に付ける）
- ・ 歩行の安定（親からの距離的分離（挑戦）と再接近（安心））
- ・ 分化の形成：個々の存在の理解

◎ 幼児期後半：3歳～6歳

- ・ 幼児期の発達  
ごっこ遊び、模倣、練習  
独立心が旺盛に 3歳児の自己主張（反抗期）  
異性の親への愛着と同性の親への反発

◎ 6歳までの育ちの中で変化する行動

- |  |   |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 減少する行動</li> <li>甘える</li> <li>助けを求める</li> <li>わがまま</li> <li>情緒不安定</li> <li>動揺しやすさ</li> <li>しがみつき</li> <li>（自我が芽生える）</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 増加する行動</li> <li>きまりを守る</li> <li>協力する</li> <li>協調的である</li> <li>親切である</li> <li>責任感がある</li> </ul> |
|--|---|

◎ 発達段階と子どもの行動

1歳	自我の芽生え
2歳	走り回る模倣する子：おもしろい年齢
3歳	何でもする子：楽しそうな年齢
4歳	発見する年齢
5歳	自信をもつ年齢

◎ 学童期（小学校時代）

- ・ 勝ち負け経験のバランス
- ・ 疑似体験から直接体験へ：ファンタジーからリアルへ
- ・ ほめられることと叱られることのバランス

- ・ 親密な同性同年代の友人の登場
- ・ 孤立・孤独感から思春期へ（躰で違う）

### ◎ 児童期前半の成長の様子（1）

- ・ セルフエスティーム（自尊感情）の形成
- ・ 3～10歳にかけての時期が最も大切
- ・ 他人（他の子ども）との相互交流で形成される
- ・ 大人の評価も大きな影響力をもつ

### ◎ 児童期前半の成長の様子（2）

- ・ 認知・思考の発達
- ・ 部分と全体の知覚  
小学低学年から徐々に全体把握力が高まる  
機械的記憶は12, 3歳がピーク

- ・ ADHD 移動しない移動（机をがたがたさせたり、音を出したりする）  
10歳くらいになると、脳が成熟してきて飛び出すことは無くなる。

- ・ 昔の学校は

- 40% 子ども同士の楽しいサロン
- 40% 託児所
- 20% 勉強

ところが、現在は100% 勉強になっている。

親だからといって、子どものことを100%は分らない

何でも知りたい・支配しない

心を理解するより、行動を理解してやる

乱暴な行動——どうして乱暴するのかな

分かるために、対話する

対話の秘訣は、子どもを尊敬すること

対話して、進化して、追い越していく

親が子どもに一番近いと自信を持って、ほどほどに付き合っていこう

### ◎ 児童期前半の成長の様子（3）

- ・ 言語の発達  
自己中心的言語、内言（～7歳）、思考する言語から  
伝達する、他者とのやり取り、コミュニケーションの道具へ
- ・ 読み言葉の発達  
読めるひらがなは4歳から急激に増加し6歳でだいたい読めるようになる  
言葉の外在化、自分で自分と会話する

### ◎ 児童期前半の成長の様子（4）

- ・ 書き言葉の発達  
書けるひらがなは、読みの半年から1年後についてくる（個人差は大きい）  
筆順は不正確（視覚的能力が優位なため）  
鏡文字：幼児期～小学校低学年で普通
- ・ 読書の発達  
5歳くらいから自分で絵本を読み始める（読字と理解する力は一致してはいない）

### ◎ 児童期前半の成長の様子（5）

- ・ 絵の発達

7・8歳くらいまではパターンで図式化している  
9歳以降から写實的描画へ

◎ 情緒の発達

	怒り	ねたみ	恐れ	愛情	喜び
6、7歳	かんしゃく	持ち物、友人の独占	動物、幽霊 泥棒	異性の親へ 愛情あり 同胞に薄い	冗談の理解は無理
8、9歳	身体的攻撃 減少、口げんか増加	告げ口、成績への嫉妬	火事、地震 けが、戦争	友情、同情心、同胞をかばう	先生の誤りを指摘、冗談が分かる
10,11,12歳	容姿へのからかい、論理的口論	成績、名誉への嫉妬、批判、中傷	死、事故、失敗、恥	異性への関心	努力、過去への思い出

◎ 10歳の分岐点

- ・性的差異  
男女の成熟性の差異
- ・言動のまとまり
- ・積極性と落ち着き
- ・儀礼的つきあい（折り合い）
- ・強い感受性（正義感）
- ・家族集団から友人  
クラブ活動へ
- ・個人的才能の萌芽
- ・計画的な行動
- ・秘密、嘘、魔術、ヒーローへの憧れ
- ・ちょっとした背伸び
- ・そして思春期へ

3 家庭はどう変わったのか？

◎ 家庭の変容に関する3つの誤解

- 1) 核家族化の問題
- 2) 家族が崩壊し、病んでいる？
- 3) 女性の自己実現による少子化と不適切な育児

※ 社会全体の問題なのに、家庭の問題にしてしまいたい

◎ 家族の生活の質的変化

- 1) 生産から消費へ
- 2) 愛情の「異常」な強調
- 3) 「教育」する家族（全てルールがひかかれている）
- 4) 育児責任の母親への集中と父親不在

◎ 困難な子どもの自立と親の見守り

- 1) 我が子のことは何でも知っている
- 2) なぜ 子どもは支配されるのか？
- 3) 支配されている子どもを「理解している」と思う親
- 4) 親の支配力
- 5) 愛情と善意という厄介なもの

#### 4 子どもが育つために

##### ◎ 心を理解する前に行動を理解しよう

- ・ ある人間が、ある場面で、ある行動をとるのは、様々な状況の中、これまでの経験や、自分の総合的な対処能力を背景にして、そのときに行える選択の余地のない行為であるという理解
- ・ 不登校、暴力、キレる、など  
「どうしてそのようなことをしたの？」という問いは、その行為以外に策のない相手を傷つけるだけの「非難」である。

なにをしようとしたのか？ どうしようと思ったのか？

- ・ それ以外の行為がとれない「今」を共有して初めて、「聞く耳」をもってくれる。
- ・ 互いが成長する関係を持つよう

##### ◎ 対話（コミュニケーション）

- ・ 親子の対話は一方的なものではなく、相互的である。
- ・ しかし、主導権は親にあるため、親子の対話が時に親の支配となることがある。
- ・ 親子の対話における秘訣は、子どもへの尊敬の念と、親が自分自身と先ず対話すること。
- ・ 子どもからの信頼を得たとき、初めて親は子どもの心に気付くであろう。
- ・ 信頼を得るためには、対等にかつ尊敬する態度が求められる。
- ・ 対等に見ながらも、子どもはつねに成長する、進化するものである。

##### ◎ 親は子どもに対してもっと自信を持とう

- ・ なんだかんだいっても24時間わが子と付き合っている
- ・ われわれがここまで「それなりに、ほどほどに」育ってきたという自負

##### ◎ 育児と教育に必要な4つのS（アドラー）

- 1 尊敬（親ばか）  
何をしても素敵だと感じることを、プラスのエネルギーを与える
- 2 責任（最後まで責任を持つようよ）  
責任のとり方、とらせ方、結末の体験
- 3 社会性  
社会の中での自分の要求を通して、しかも他人を傷つけない技術＝人間関係の技術
- 4 生活力  
生き残る力、生きていく力

※ 親が子どもに一番近いと自信をもって、ほどほどに付き合っていこう。

##### ◎ 基本的対応

- ・ 育ちには育つだけの時間が必要  
結論を急がずに待つ  
援助の持続  
存在を否定しないで行動を正しく評価
- ・ ほめ方に配慮する  
長所を探し、認める  
馬鹿にせず、真剣に話を聞く  
不適切な言葉はかけない
- ・ 正しく向き合う  
言葉や大人の都合で子どもをごまかさず、支配せず、尊重する  
言動だけでなく、具体的な行動を示唆し、時に一緒に行動する  
見返りを期待せず信頼する
- ・ 発達評価と今、出来ることの検討の繰り返し

- ・感情システムの構築

◎ 子どもの行動と親の反応を3種に分ける

今現在している 好ましい行動	現在の好ましく ない行動	止めるべき許し がたい行動
褒める（よいと ころを伸ばす	無視する（褒める ために待つ）	制限を設ける 断固、公正に対応
肯定的な注目を する	好ましくない行動 が止まったらすぐ に褒める ・やめれた、えらい ・よく止まったね ・あなたはいい子だ	体罰はだめ  ・声を出さない ・羽交い絞めにする ・体が言うことをきかない

◎ どのようにほめるか

行いを褒めましょう  
 タイミングは行いの最中か直後  
 目を見て  
 子どもの高さで  
 笑顔で  
 喜びを表す声の調子で  
 短いことばで  
 子どもがどんな褒め方を喜ぶかに合わせて  
 皮肉は交えず

- ※ 3つ、褒め言葉を出せるように（親は5つ）
  - ・ いいところを作ろう
  - ・ そうすると長所が出てくる
  - ・ 5ついいところがあるんですよ（人前で褒める）
- ※ 子どもを褒める
  - 生きづらいんだろうな
  - 生きやすくしていく

◎ お子さんのことで困っていることがありましたら、ご相談ください。

- ・ 江別市教育委員会学校教育課（Tel 381-1058）  
江別市高砂町24-6  
特別支援教育コーディネーター 深瀬 禎一
- ・ 江別市子ども発達支援センター（Tel 385-1015）  
江別市錦町14番地の87
- ・ 北海道立特別支援教育センター（Tel 612-5030）  
札幌市中央区円山西町2丁目1番1号